

# Morrison 文庫貴重洋書目録解題

著者 田仲一成

## I. モリソン蔵書の構成

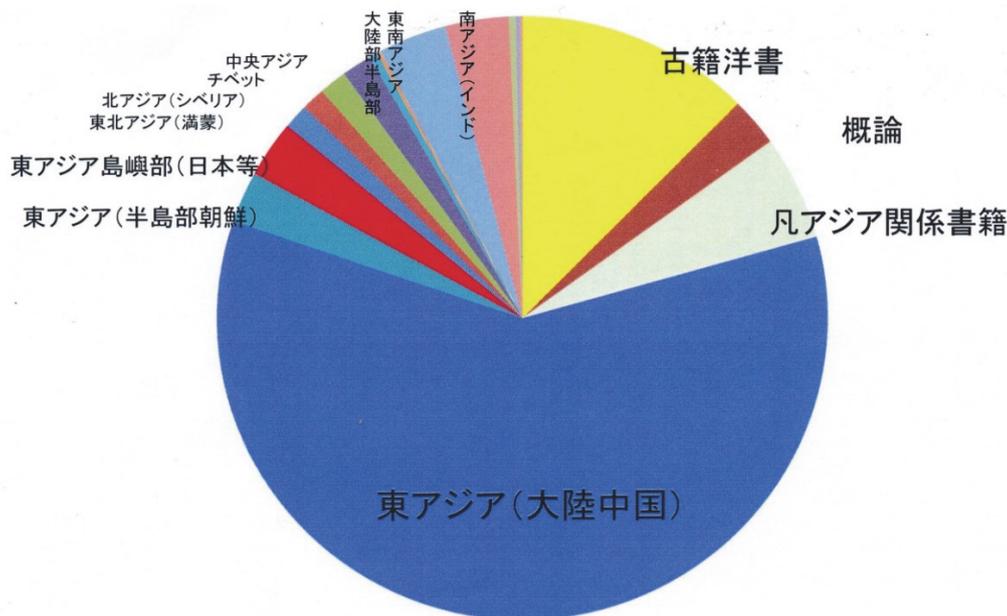
モリソン文庫の蔵書，11,000 点は，地域別にみると，次のとおりである。

	分類	件数
特	古籍洋書	1,424
I	概論関係書	301
II	凡アジア関係書籍	638
III	東アジア(大陸中国)関係書	6808
IV	東アジア(半島部朝鮮)関係書	314
XVII	東アジア島嶼部(日本等)関係書	347
V	東北アジア(満蒙)関係書	152
VI	北アジア(シベリア)関係書	141
VII	チベット関係書	169
VIII	中央アジア関係書	181
IX	東南アジア島嶼部関係書1	52
X	同2(フィリッピン)	21
XI	東南アジア大陸部半島部関係書	415
XII	南アジア(インド)関係書	385
XIII	西アジア大陸部関係書	39
XIV	西アジア半島部関係書	34
XV	古代オリエント関係書	0
XVI	西アジア&北アフリカ関係書	10
合計		11,431

(大型本，銅版画を含む)

第1表 Morrison 文庫書籍構成表

これを円形グラフで見ると，次のようになる。



第1表 グラフ Morrison 文庫書籍構成グラフ

これによると、中国に関する書籍が圧倒的に多く全蔵書の60%を占める。北京駐在の新聞記者として、中国情報を集める必要があったためであろう。ついで朝鮮、日本、満蒙、シベリアなど、東北アジアが多く、8%を占める。これに中央アジア、チベットの3%を加えると11%に達する。これは、モリソンの北京駐在時代に、この方面に紛争が多発しており、関連書籍の収集に努めた結果と思われる。南の東南アジアとインドも合わせて8%と多い。これは、Times 記者勤務の当初、タイに滞在していて、この方面の情報収集に関心があったためと思われる。これに対して、西アジアに関する書籍は極めて少なく、0.7%にとどまる。古代オリエントに至っては皆無である。この方面は、東洋とは言えず、北京駐在のTimes 記者としては、守備範囲の外にあって、関心が薄かったと言えよう。

## II. モリソン古籍洋書の地域別構成

次に、古籍洋書についてみる。東洋文庫で古籍洋書というのは、1820年以前に刊行された書籍を指す。数量としては1,100点、種類としては、①貴重書籍 Precious Books、②写本 Manuscripts、③古書 Old Books の三種に分けている。

①の貴重書籍とは、13-14世紀、地中海を發して、大陸を横断して東方に赴いた旅行家のアジア情報を記した書籍で、マルコポーロ31点、マンデヴィル12点、計42点を擁する。

ここには、51種の超貴重書が収められているが、そのうちMarco PoloとMandevilleの著作が合計で42種を占める。Marco Poloについては、31種あり、刊行年次順に示すと、次のとおりである。

## Morrison 文庫 Marco Polo 書籍年代順リスト

請求記号	出版年	出版地	著者
PB-1	1485	Anvers	Marco Polo
特 PB-1	1485	Anvers	Marco Polo
PB-2	1496	Venetia	Marco Polo
特 PB-2	1496	Venetia	Marco Polo
PB-3	1508	Venetia	Marco Polo
特 PB-3	1508	Venetia	Marco Polo
PB-4	1533	Venetia	Marco Polo
特 PB-4	1533	Venetia	Marco Polo
PB-5	1555	Venetia	Marco Polo
特 PB-5	1555	Venetia	Marco Polo
PB-6	1556	Paris	Marco Polo
特 PB-6	1556	Paris	Marco Polo
PB-7	1601	Çaragoça	Marco Polo
特 PB-7	1601	Çaragoça	Marco Polo
PB-8	1602	Venetia	Marco Polo
特 PB-8	1602	Venetia	Marco Polo
特 PB-10	1611	Leipzig	Marco Polo
PB-9	1611	Leipzig	Marco Polo
特 PB-9	1611	Leipzig	Marco Polo
PB-11	1626	Venetia	Marco Polo
特 PB-11	1626	Venetia	Marco Polo
PB-12	1657	Trevigi	Marco Polo
特 PB-12	1657	Trevigi	Marco Polo
PB-13	1664	Amsterdam	Marco Polo
特 PB-13	1664	Amsterdam	Marco Polo
PB-14	1671	Coloniae Brabdenburg	Marco Polo
特 PB-14	1671	Colonia Brandenburgicae	Marco Polo
PB-15	1671	Coloniae Brabdenburg	Marco Polo
特 PB-15	1671	Brandenburg	Marco Polo
PB-16	1672	Trevigi	Marco Polo
特 PB-16	1672	Trevigi	Marco Polo

1400年代から1600年代まで、古いEditionをよく集めている。刊行地は、ヴェネチア、トレント、ブランデンブルグ、ライプチヒなど、イタリアから神聖ローマ帝国を中心に行っている。

Mandevilleについては、12種、年代順に示すと、次の通り。

Morrison 文庫 Mandeville 書籍年代順リスト

請求記号	出版年	出版地	著者
PB-17	1485	Anvers	Mandeville
特 PB-17	1485	Anvers	Mandeville
PB-18	1488	Bologna	Mandeville
特 PB-18	1488	Bologna	Mandeville
PB-19	1497	Milano	Mandeville
特 PB-19	1497	Milano	Mandeville
PB-21	1684	London	Mandeville
特 PB-21	1684	London	Mandeville
PB-22	1722	London	Mandeville
特 PB-22	1722	London	Mandeville
PB-23	1727	London	Mandeville
特 PB-23	1727	London	Mandeville

ここも刊行年代は、1400年から1600年代が大部分を占める。刊行地はやはりイタリアが中心であるが、時代が下がると、ロンドンが目立ってくる。

②の写本は、概ね19世紀にインドから中国事情を探索したマカートニー関係のもの、52点である。

③の古書は、15-6世紀の大航海時代以降、喜望峯を經由でインド、中国を往復した近代の探検家のアジア情報を記録した書籍で、930点を数える。このうち、15世紀の本は、ほとんどなく、主として、16世紀、17世紀、18世紀の本で占められる。前掲のグラフで古籍洋書として示した書籍の総計は、1400点となっているが、このうち大型本や銅版画など約300点を除くと、その合計は1,100点になる。このうち、①貴重洋書52点、②Manuscripts51点を除き、③の古書930点の内訳を示すと、次の表の通りである。

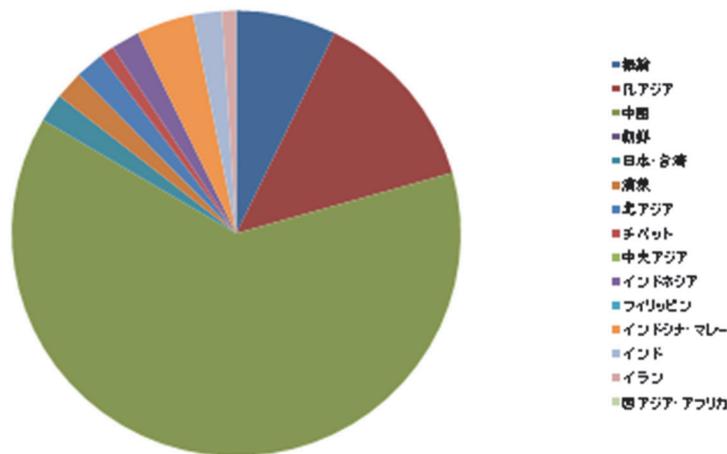
番号	地域別	書籍数
1	General Books	70
2	General Books / Asia	127
3	East Asia / Mainland (China)	574
4	East Asia / Peninsula (Korea)	3
5	Northeast Asia	18
6	North Asia	15
7	Tibet Plateau (Tibet)	12

8	Central Asia	7
9	Southeast Asia / Islands1 (Indonesia)	16
10	Southeast Asia / Islands2 (Philippine)	1
11	Southeast Asia / Continent & Peninsula (Indo-China, Malay)	35
12	South Asia (India)	20
13	West Asia / Continent (Iran)	12
16	West Asia & North Africa	6
17	East Asia / Islands (Japan, Taiwan)	14
		930

第2表 Morrison 古籍地域別分布表

これをグラフに示すと、次のようになる。

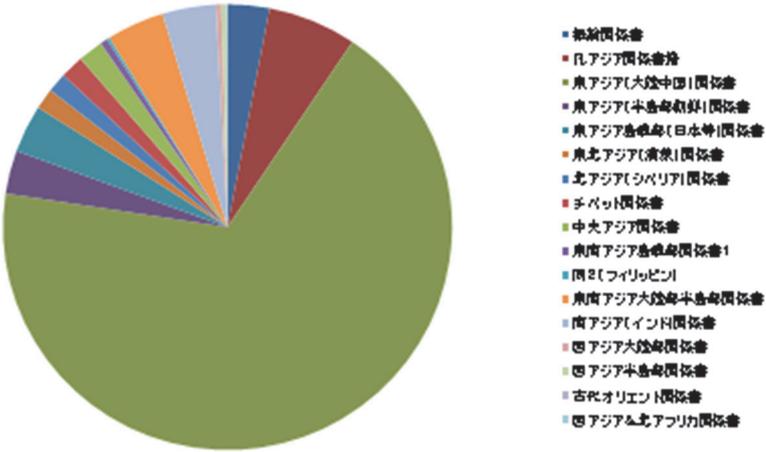
## Morrison 古籍地域別分布グラフ



第2表グラフ Morrison 古籍地域別グラフ

このグラフで、地域分布をみると、中国が61%、朝鮮、日本、満蒙など、東北アジアが5%、中央アジア、チベットが2%、東南アジア、インドが6%、という構成になる。これは、先に示したモリソン蔵書全体の地域分布に酷似する。さらに、次に示した19世紀以降の近代書の地域構成グラフと比較すると、これにも近似していることがわかる。

## Morrison近代書地域別分布グラフ



第3図 Morrison 文庫書籍地域別分布表

つまり、モリソンは、古書と近代書と問わず、同じ方針、つまり、中国に重点を置き、東北アジアと東南アジアを両翼に据えて、アジア情勢を見てゆくと言う姿勢を貫いていると言える。古書を集めるにしても、近代とのつながりを重視していたと思われる。西アジアやオリエントを無視していることも、その反映であろう。

### Ⅲ. モリソン古籍洋書の刊行年・刊行地

中国や日本の古書では、刊行年や刊行地を記していないものが多く、1,000点ぐらいの書籍では、統計的な分析は不可能であるが、モリソンの古書は、ほとんどが刊行年と刊行地を記している。このため、この1,000点だけで、ある程度の統計的考察が可能である。欧米人は、東洋人に比べて、時間や空間における、事物の座標軸的な特定に優れていると言える。以下、これを僥倖として、モリソン古書の成書時期と刊行地に関し、統計的な俯瞰を試みたい。

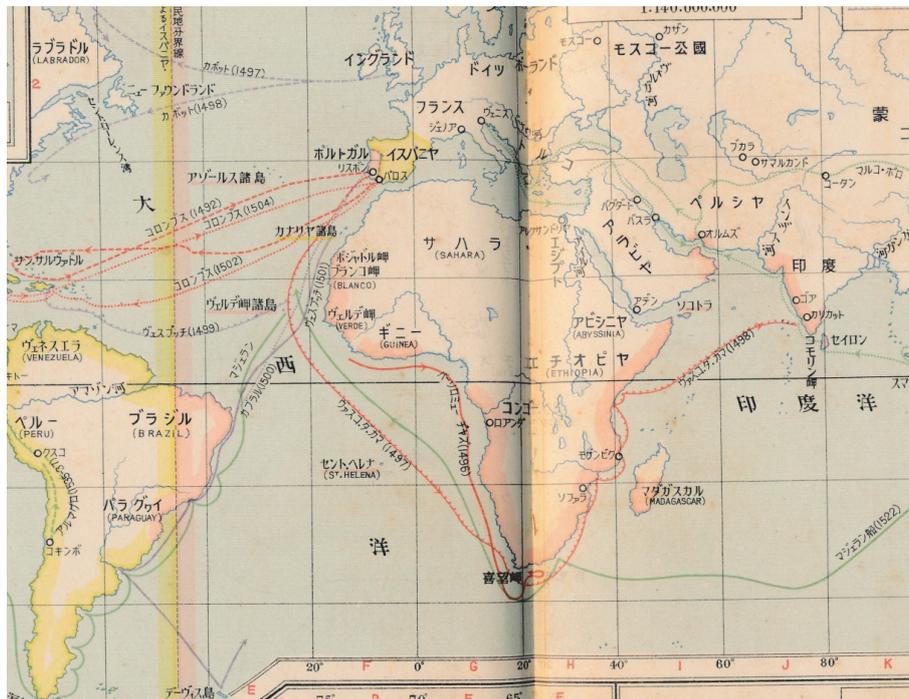
貴重洋書に分類されているモリソン蔵書は、マルコポーロ、マンデヴィルの2種の書籍だけで、しかも数が多いので、ヨーロッパ全体のアジア関係書の刊行地の分布傾向を統計的に論ずるには、適当でない。ただ、1454年ごろ、Gutenbergが活字印刷を発明してから、ドイツの職人たちがこの印刷業を独占し、諸国の都市に工房を開き、また既存の工房を遍歴しながら活躍したと言われる。文庫所蔵のMarco Poloの東方見聞録31種についてみても、北部ドイツのBrandenburg、中部ドイツのLeipzig、イタリアのVenetiaなど、いずれもドイツ人の印刷工による刊行である。AmsterdamやParisは、かなり遅れる。

Mandevilleの旅行記12種についても、刊行地は、Venetia, Bologna, Milanoなどイタリア各地と、オランダのAnvers、それにイギリスのLondonの3国で占められる。

資料が少なすぎて、断定はしかねるが、この地中海航海時代の印刷は、おおむねイタリアとこれに接続するドイツ、神聖ローマ帝国に集中していたと推定できようか。

#### (1) 16世紀古書の刊行地

次に16世紀の初頭、所謂大航海時代に入って、従来の陸上旅行と異なり、喜望峰を回って海路、インド、東南アジア、中国などへの渡航が可能となって、アジア関係書籍も増加したはずである。アジア関係書籍の刊行にも、これにともなう変化も多少見えてくる。

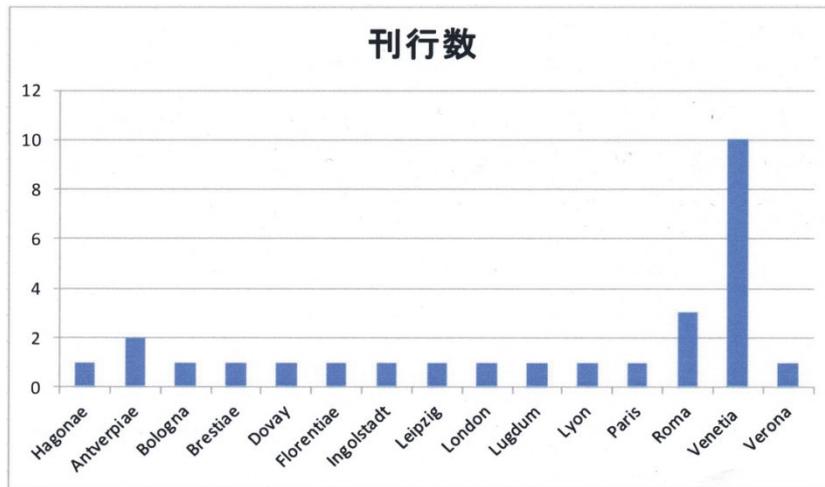


第4図A 15-16世紀大航海時代図（三省堂『西洋歴史地図』）

まず、モリソン蔵書に含まれる16世紀の書籍も若干増えて、27種に達している。決して多い数ではないが、マルコポーロとマンデヴィルの2種に比べれば、視野は格段に広がる。以下、刊行地の分布を表したグラフと16世紀のヨーロッパ地図を示す。



第4図B 16世紀Europe地図（三省堂『西洋歴史地図』）



第4図C Morrison16世紀古籍刊行地分布図

この時期、刊行地は、16都市を数える。27種の刊行書籍のうち、Venetia, Roma, Bologna, Florenzなど、イタリア王国内の地点が16種を占める。Leipzig, Ingolstadtなど、南ドイツの都市が見えるのは、神聖ローマ帝国とイタリアの密接な政治的関係の反映であろう。ただ、オランダのハーグやベルギーのアントワープ、フランスのパリ、イギリスのロンドンの名が見えており、大航海時代、東インド会社によって、アジアに進出した国々のアジア情報が反映していると見られる。

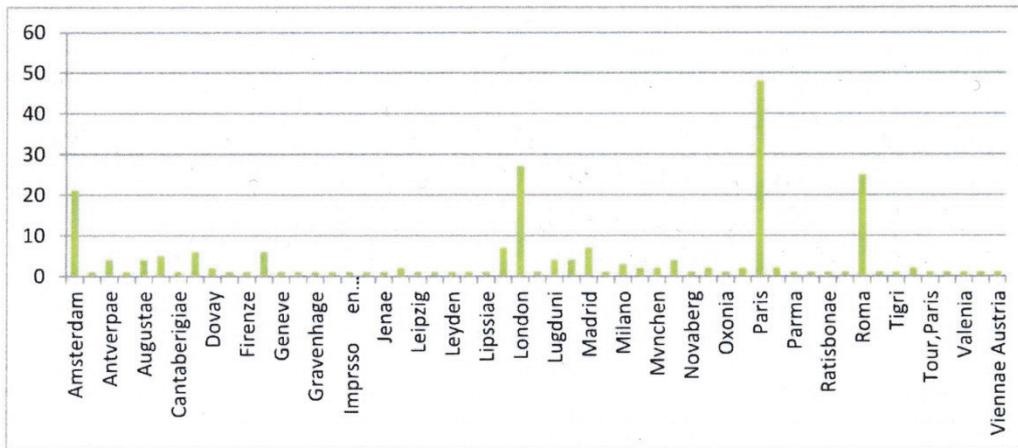
(2) 17世紀古書の刊行地

次に1600年代についてみる。書籍数は急増し、223種に達する。当時の地図とともに刊行地別書籍数の分布をグラフで示す。



第5図A 17世紀 Europe 地図 (三省堂『西洋歴史地図』)

Morrison1600年代古籍洋書刊行地別部数



第5図B Morrison17世紀古籍刊行地分布図

ここでは、刊行地は、56地点に増えている。1500年代に比べて、3.5倍に増えている。書籍数は、223種、これも1500年代の27種に比べて、8倍に達している。アジアに対する関心がこの時期に急速に高まったことを推測できる。

ここでは、Roma, Milano, Napoliなど、前世紀に引き続き、イタリアが勢力を維持しているが、Amsterdam, Antversなど、オランダの都市が伸びている。この時期のアジアにおけるオランダの活発な植民活動を反映している。また、ポルトガルのLisbon, スペインのMadridなど、1500年代にアジアに進出した国々の都市が目立ってくる。また、フランスのParisが突出し、La Haye, Lyonなどもこれに加わってフランスの都市が目立つのは、学問の中心がイタリアからフランスに移ってきているためであろう。イギリスのLondonは、Parisに及ばないが、それでも東南アジア、中国関係書籍の印刷で、台頭し始めている。

Frankfurtを中心にしたドイツ南部も参入してきている。総じて、この時期では、大航海時代を反映して、ヨーロッパ各地でアジアへの関心が高まり、アジア関係の書籍が、ヨーロッパ全土で印刷されたといえよう。

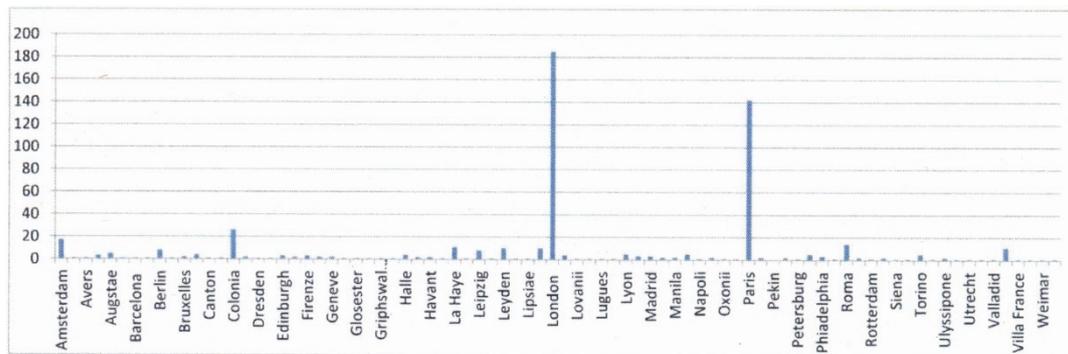
### (3) 18世紀古書の刊行地

次に1700年代をみる。568種の多数に上る。地図とともに刊行地別書籍発行数の分布グラフを示す。

ここでは、1600年代に比べて、刊行地が82地点に増え、書籍数の合計は、568種に達する。ここに至って、アジアの関係の書籍は、ヨーロッパ全土で刊行されるに至ったわけである。イタリア (Venetia, Colonia, Milanoなど)、オランダ (Amsterdam)、スペイン (Madrid)、ポルトガル (Lisbon)など、前世紀に引き続いて刊行を続けているが、新興のイギリス (London)、フランス (Paris)の躍進が目立つ。この時期、ヨーロッパ全土にアジアへの関心が一層、高まるとともに、大航海時代を終えて、イギリスとフランスの二大強国によるアジア植民地をめぐる角逐が激しくなっていることを反映している。



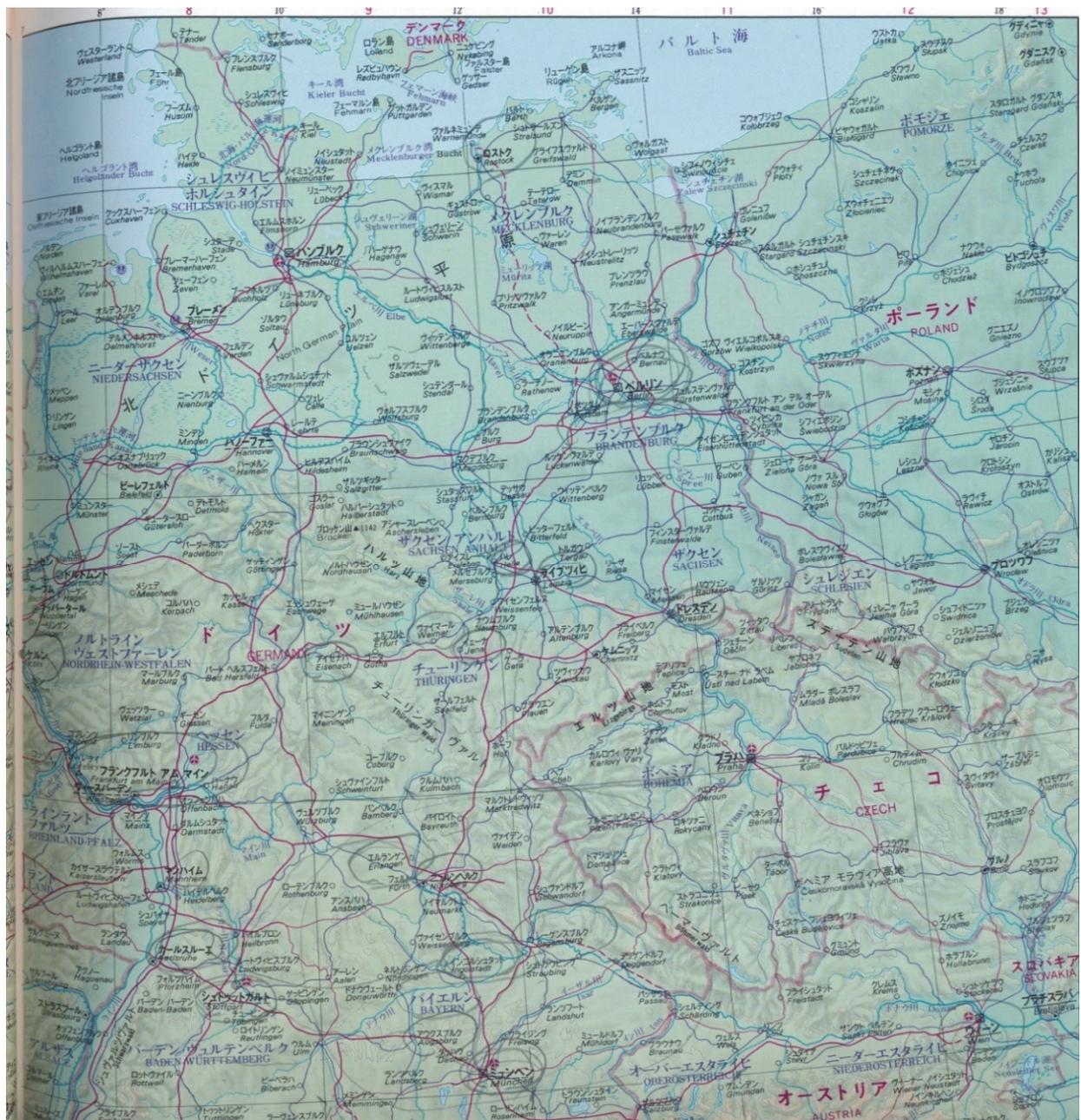
第6図A 18世紀 Europe 地図（三省堂『西洋歴史地図』）



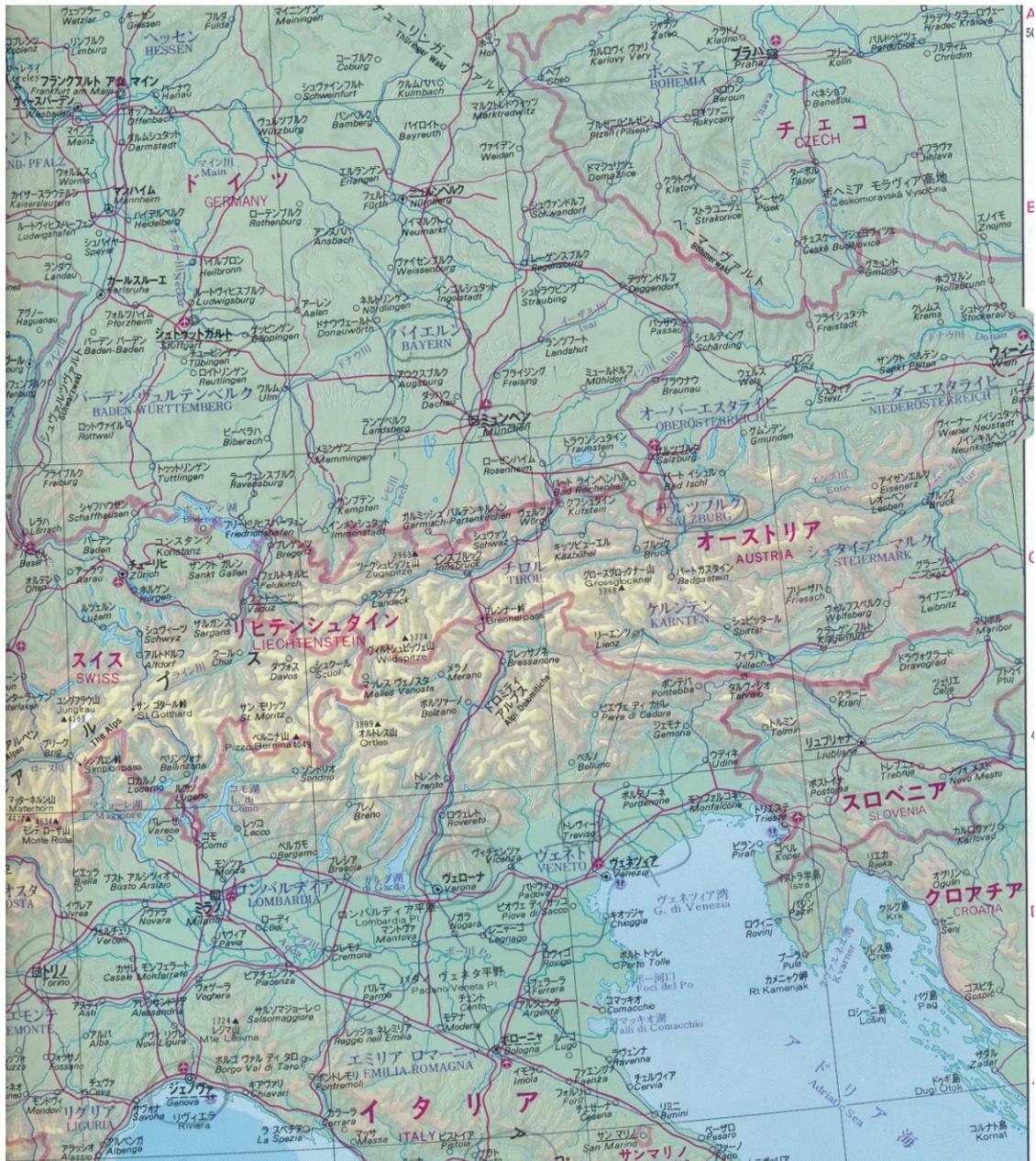
第6図B Morrison18世紀古籍刊行地分布図

(4) 刊行地の重点分布地

以上、16世紀から18世紀までの、ヨーロッパにおけるアジア関係書籍の刊行地の分布と時代別変遷について概観した。それらの刊行地のうち、現在の地図で同定できるものを、以下の地図の上に、まるい線で囲って示した。



第7図A Europe 中心部 Map (国際地学協会, 『世界地図』, 中野尊正監修)



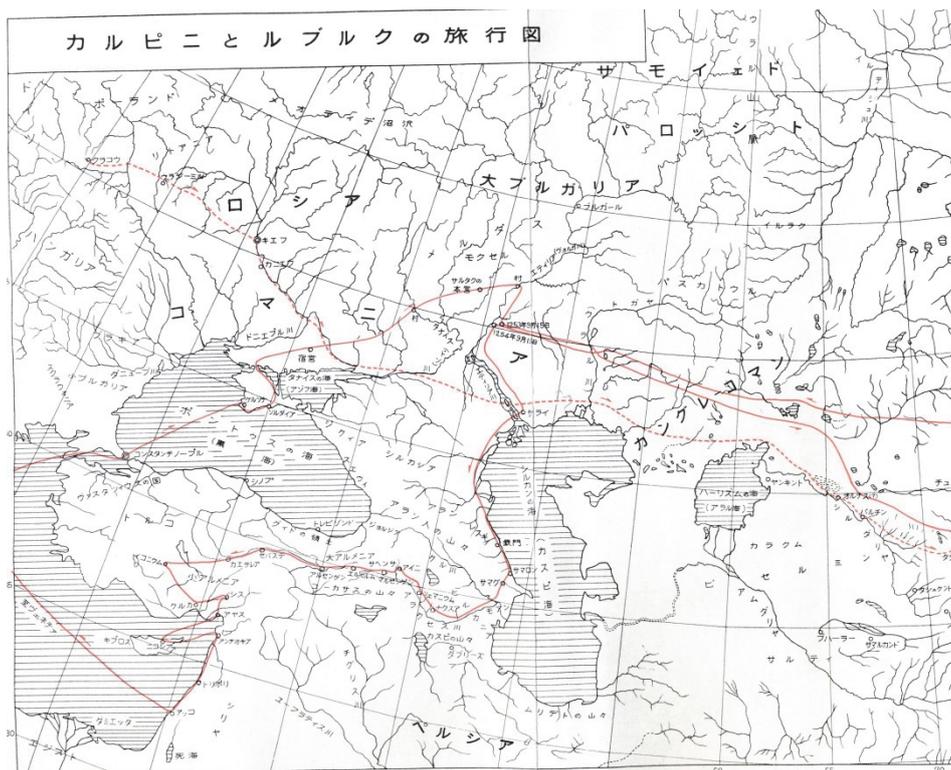
第7図 B Europe 中心部 Map (国際地学協会, 『世界地図』, 中野尊正監修)

#### IV. モリソン古籍洋書の内容

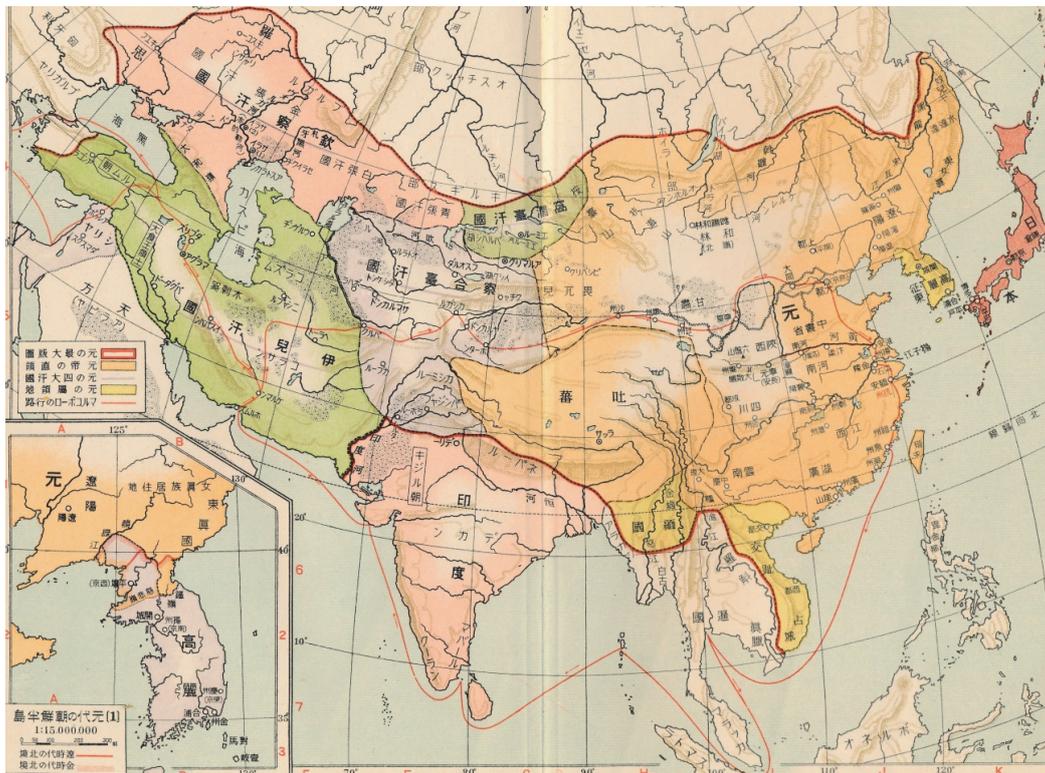
次にモリソン古書の内容について、概観する。まずどのような本が集まっているのかを、検討してみよう。ここで参考となるのは、石田幹之助『欧人の支那研究』（1932年初版、1946年再版）である。ここには、13世紀のマルコポーロ以来、19世紀初頭のフランスシナ学の成立に至るまで、約600年にわたる間に出現した欧人の東方旅行者、東方貿易者、東方伝道者、東方学者として、118名の人物の名を挙げています。後掲の資料(2)に示した通りである。このうちモリソン蔵書にその著作があるものが50名あり（番号が付いているもの）、モリソン蔵書にはないが、東洋文庫にその著作があるものが33名ある（東洋文庫と書いてある欄に○を記入してあるもの）。合計で88名、これは総数118名の74.5%になる。石田先生の挙げた118名の中には、著作名があげられておらず、したがって著作があるかないか不明の人が23名含まれているから、これを総数の118名から除外すると、総数は95名となる。これを母数として、88名の比率をみると、92.6%となる。つまり、モリソン蔵書を中核とする東洋文庫蔵書は、石田書の9割を原書で持っていることになる。実に驚くべきカバー率というべきであろう。東洋文庫は、創設以来、モリソン蔵書を独立させず、補充購入したものと合わせて排架した。モリソン蔵書は、上に見るように88名の著者の中で50名、56%を占めて中核としての存在感を示しているが、それでも十分とは言えなかった。東洋文庫としては、33名の著作を補充する必要があったのである。両者を不可分のものとして、混合して排架したのは、研究の上では、正しいやり方であった。今回、Museumの設立のために、モリソン蔵書を分離独立させたが、研究図書館としては、問題があると言わなくてはならない。以下、石田書第4章以下の目次の順序、つまり13世紀以降の時代順にモリソン蔵書の状況を概観する。

##### (1) 蒙古人勃興時代におけるシナに関する知識—石田書第4章（13世紀から14世紀）

ここでは、モリソンは、Marco PoloとRubruquisの二人の書を集めている。特にMarco Poloの版本を多数集めていることは、特筆に値する。Rubruquisについては、護雅夫先生の研究と翻訳がある。Marco Polo以前に、北側のルートから蒙古を往復したことで知られる。



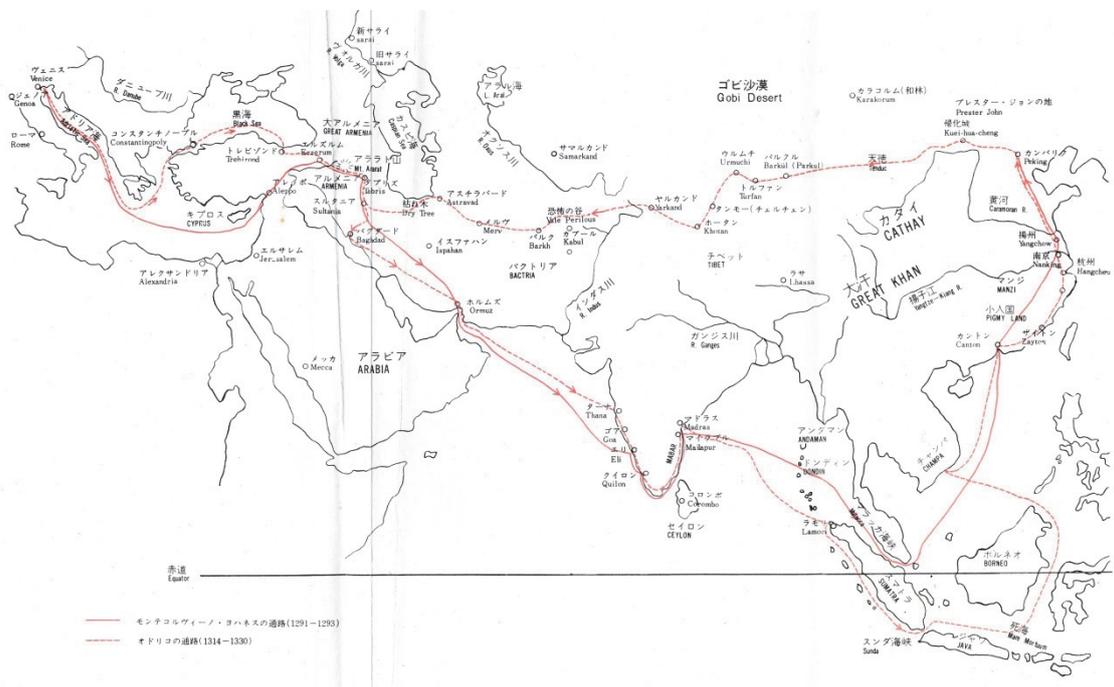
第8図 Carpini, Rubruquisの東遊路（護雅夫訳書）



第9図 Marco Polo 東遊路 (三省堂『西洋歴史地図』)

(2) 第14・5世紀(元より明初)における欧西のシナ知識—石田書第5章(1500-1600年代初頭)

ここでは、Odorico と Mandeville, Ramusio の三人の著作を収集している。Odorico の東遊は、Marco Polo の直後の大都訪問として知られる。またモリソンは、Mandeville を12種も集めている。この書は先行書の抄録で価値がないが、古書店では高値で取引されていたと言い、モリソンは古書店から持ち込まれたものを購入したものと思われる。Ramusio は、Barbaro の旅行記の最古の版本を出版した人。



第10図 Monte Corvino, Odorico の東遊路 (家入敏光訳書)

(3) 東インド航路の発見と欧人の東航, 宣教師のシナ研究とシナ学の成立—石田書第6章(1600年代)

ここでは, Adam Shall, Bouvet, Sampaio, Le Comte の4人の著作が収集されている。この時期は, Adam Shall など Jesus 会士が中国の儀礼を認めていることに反対していた他の会派からの攻撃が起こり, 所謂「典礼問題」として物議をかました。

(4) 明清鼎革時代, 及び康熙初期—石田書第6章第1節(1600-1700年代初頭)

Morrison が収集した欧人の著作は, この時期に急増する。Semedo, Trigaut 以下, 18名に達する。そのほとんどが Jesus 会士であり, 天体観測, 三角測量により地図を作成。それを集大成した Du Halde の『シナ帝国全誌』は, 中国の地理書として最高の資料。フランスの百科全書の作風を継ぐ。

(5) 康熙中葉より雍正時代—石田書第6章第2節(1700-1735)

ここでは, ポルトガル人に対抗して寧波から北京に入ったフランス人, Fontaney, 及びシナ全土の測量に基づいて作成された地図を普及させた同じくフランス人の d'Anville の書を集めている。このころから, フランス人の勢力が増す。

(6) 乾隆時代—石田書第6章第3節(1735-1795)

Gaubil 以下, 8名の著作が収集されている。中でも Amiot の『シナ雜纂』, Gobien の『耶蘇会士書簡集』は, Du Halde の『シナ帝国全誌』と並ぶ金字塔。

(7) 18世紀中葉以降の欧州本土のシナ研究—石田書第6章第4節(1750-1814)

Fourmont 以下, 10名の著作が並ぶ。中でも1814年に College de France の初代シナ学講座教授となった Remusat, ドイツの近代シナ学を推進した Klapproth などの著作を多く収集している。

## V. 結 語

以上のごとく, モリソンの収集した古籍洋書は, 13-14世紀の地中海時代の書籍には欠けるところが多いが, 15-16世紀の大航海時代以降, 時代が下がるにつれて充実の度を増し, 17-18世紀の Jesus 会士の資料を中心に重要文献を蓄積している。1814年の College de France におけるシナ学講座の成立によって代表される近代シナ学の前史を形成する重要書籍をほとんど網羅しているといえよう。特に明末清初が充実している。

なお, この貴重洋書目録に著作が記録された人物は, 合計で602名にのぼる。今回, 取り上げたのは, 10%にも満たない8.3%の50名にすぎない。とても全貌を掌握したとは言えない<sup>i</sup>。今後, 本格的な調査によって, 全貌が明らかにされれば, より充実した近代シナ学史を構成することが可能になるであろう。石田先生の後継者の出現が待たれる。

## 註

i Henri Cordier の Bibliotheca Sinica に搭載されていない文献がかなり含まれているものと推定される。